
エンジニア（精製士）の憂鬱

蒼衣翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハンジニア（精製士）の憂鬱

【ZPDF】

Z2006Z

【作者名】

蒼衣翼

【あらすじ】

現代日本に良く似た、しかし魔物が跳梁跋扈し、ダンジョンが発生し、魔法が飛び交う、そんな世界に生きる、手に職を持つた特殊職サラリーマンの男が、踏んだり蹴つたりしながら送る人生模様。短編作品・ハンジニア（精製士）の里帰り <http://ncode.esyosetu.com/n3215y/> を長編に起こした作品です。純粹に続きでもありますが、別に前作を読まなくても問題はありません。

1、友人は時に敵である

「そりゃあ、大変だつたな」

カラソスと、いかにもな音を立ててデカイ氷の入つた蒸留酒ウイスキー硝子グラ杯なかれを回しながら、流は俺の苦労話をそう一言で片付けた。

別に大げさなねぎらいを期待していた訳でもないし、そういう間柄でもないので、俺的にもそのぐらいが丁度良い。

「大変だつたよ、もう田舎には一度と帰らねえ」

今年の初め、ぶっちゃけて言つと正月休みに、俺は実家の両親の「成人祝いをしてやる」との甘言を真に受けて、ノコノコと数年前に飛び出してそれ以降帰つてなかつた田舎の実家に里帰りした。

成人といつても社会的な成人である二十歳の祝いではなく、"ど"田舎の故郷ならではの独特な感覚での成人イコール一人前の事だ。

俺は今年二十六歳になる。社会的には立派に自立した大人ではあるが、故郷的な考え方からすれば、一人立ちして自分の能力だけで生活を切り盛り出来るようになる事が成人の証なのである。

まあ他にも色々と、田舎ならではの条件はあるが、家から自立て生計を立てていた俺は、当然既にその辺の条件はクリアしたと思っていたし、「いい相手がいるんだ」との親の言葉に、てつきり嫁の世話をしてもううと思いつたんだと思い込んで、その手の出会いに縁が無かつた焦りも手伝つて、つい、喜んで飛び付いてしまつた。

そして、帰つてみれば、

『いくらなんでもそろそろ証を立てねばならんだろ』

『まあ、行つて来い』

という、軽い言葉と共に幻想地図^{パーチャルマップ}に突つ込まれて鬼と戦う羽目になつたのだった。

しかも古典的な条件達成式開放錠^{セキュリティロック}が掛かっていて、その鬼を倒さないと出られないという非道な代物だったのである。

「しかし、鬼を調伏する家系とは聞いていたが、未だにそんな因習があるんだな」

「田舎は時が止まつてゐるからなあ」

なにしろ未だに天然ダンジョン^{スライム}が存在し、いや、それどころかちよくちよく発生すらしていいるような辺境なのだ。

うん、今回の帰郷の時も思いつきり迷い込みましたよ。なんかちよつと遠い目になりそうになるが、もう大人だからね、泣いたりしません。

そういうガキの頃も、なぜかショッちゅうダンジョンに突つ込んでたなあ。

俺が泣きながら大なめくじを殴つてると、決まってお袋が魔除け灯を掲げて迎えに来てくれたもんだ。

「家族つてのはどうしてだか、みんなが同じように家族の一員である事にやたらと拘るからなあ」

流もしみじみと洩らす。

こいつの家族もこいつの今の仕事には大いに不満があるらしい。

博士号を持ち、うちでも特に高給取りなのだが、元々国を動かす

立場の一族なのだそりで、ここでのやつてる仕事など下賤なものに
しか思えないらしい。

家格の違いというやつか、恐ろしい話ではある。

俺どこにしつが仲良くなつたのも、全く逆の家柄ではあるが、家族
から今の職場で働く事を反対されているといつ一點で立場が共通し
ているのがきつかけだった。

「一応憲法で職業選択の自由が保証されているんだから好きにさせ
ろつてんだ」

「正にその通りだ。時代錯誤も甚だしい

一人で家族へのレジスタンス魂を盛り上げてると、流の傍らに
女性が一人近付いた。

「なあに？難しいお話？男一人で鬻めつ面してないで、一緒に楽し
いお酒を飲みましょうよ

隣の店の人気ホステスのミニキちゃんだ。

流はあちこちの店に顔が利き、しかもモテモテで、あまり一人だけ
でじつくり飲んでいたりすると一定時間でこうこう風に牽制が入
る。

どうやらこの店にいる事がさつそくバレてお迎えが来てしまった
らしい。

「ああ、後で顔出しそるからあつちで待つてくれ、ママさんこ
よろしく言っておいて」

「はあい。お邪魔しました」

可愛らしげに仕草でペロリと頭を下げる、俺とマスターにも一礼して戻る。

彼女は軽いようで、いつの間にか細かい所で礼儀を忘れないで人気があるのだ。

ここで俺に対しても舌を出したりあからさまな態度を取る女の子は、夜の世界では一流にはなれない。
まあどうでも良い話だけだ。

「相変わらずモテモテで羨ましいよ。夜の帝王って感じだな」

あれ?なんかこいつ、胸の奥からどす黒いモノが湧いてくるよ。イケメンで金持ちで家柄良し、改めて考えるとムカツク男なのだ、こいつは。

なんだ、同じ境遇とか俺の勘違いじゃね?イケメンは滅びれば良いのに。

実際、流は男の俺から見ても文句の付け所の無いイケメンだ。付け焼刃じゃ身に付かない洗練された拳動、いかにも上流貴族らしい上品で、ながら男らしい顔立ち、特権階級を表す一部色変わりの髪も玉の輿狙いの女にはたまらないだろう。

「馬鹿言つな、これで色々と苦労も多いのさ。行く店や遊ぶ女の子に偏りが出ると恨まれかねないからね」

うん、そうだね。イケメン爆発しろ。

「へえ」

俺の嫉妬の炎が酒と共に臓腑を焼く。

そんな俺の気持ちを知つてか知らずか(いや、知るまい、こいつなんだかんだといってお坊ちゃまだからな)流は、ふと思い出した

ようにな話を変えた。

「やうやう、こないだ言つてた、調整を頼みたい物なんだけど」

言いながら腕から外したそれは、俺も先程から気になつてた物だ。おおお、カタログやテレビジョンとかじやなくてナマの本物を初めて見たぜ！

それはゴツイ造りの時計ウォッチだつた。

もうほとんど装具ブレスレットに限りなく近い見掛けだが、中身は精度世界一を誇るゲルマン帝国の「シン」ブランドだ。

この会社は創立者が空軍パイロットだった事もあって精度や機能性を追求したゴツいモデルばかり作っていたメーカーだったが、最近やや装飾を加味したデザイン時計を作り始め、その最新タイプがこれのはずだ。

装飾といつても華美な物ではなく、あくまでもいぶし銀の本来のブランド的な魅力を捨てていかない実用的な物で、なにより重要なのはその装飾部分の機能である。

なんと、アタックサバイブと呼ばれる最新の防御術が施されていて、装着者に突然の物理的危機が生じた場合、瞬間的に展開してそれを守るというセーフティ機能なのだ。

流石現役ミリタリーウォッチの面目躍如といった所だ。

「ん？これ」

以前カタログで見たのと色合いが微妙に違つ。もしかして密かにオーダー品なんじゃないか？

流にその旨を聞くと、「いや、プレゼントだから良く分からない」と返された。

イケメンと金持ちを併せ持つ友人に思わず呪詛を掛ける所だった。
危ない。

まあいい、おかげでこんな凄い時計を分解出来るんだ。それで相
殺しておこう。

「隆、お前なんか時々怖いぞ」

「顔が怖いのは生まれつきだ、ほっとけ」

「いやいや、そうじやないから。それに別に怖くないし。こないだ
の店のコキちゃんなんか『野性的で素敵なお友達ね』って言つてた
ぞ」

なんだと……いや、無駄な期待は止すんだ俺。コキちゃんはきっと、
将を射んと欲すれば先ず馬を射よとの諺通り、こいつを落とす
のに周りから攻めただけなんだ、期待すればきっと傷付く、……で
も、ちよつと今度コキちゃんのいる店に顔見せてみるかな。

「うん、じゃあ、こつものよひに調整しようと。愚痴を聞いてくれて
サンキュー」

「ああ、もう帰るのか？お前いつも早いよな。もしかして家に同棲
中の彼女とか？」

「この訳無いだろ！ボケエ！」

「アハハ、じゃあ、また明日職場で。お疲れさまでした」

「せつかく浮世離れした場所に来てるのに仕事の挨拶とか、ちよつ

とお読みよ、お前

「よく言われるよ。どうも切り替えが苦手な質でね

「顔は派手なのにワーキングホリックだよな、大概」

「派手は余計だ。お前だつて趣味と仕事の線引きが出来無いくせに」

「むひ、俺は楽しんでるから良いんだよ」

ほびほびの酔いを楽しみながら夜道を歩いて帰る。
そこかしこの暗闇には薄い邪氣がたよつていて、それはちょっと
と『暗い』だけで実害が有る訳じやないので安心だ。田舎とは大違
いである。

なにしろ大都市には全て大掛かりな結界が張られているので、人
に悪さをするような凶悪な怪異マガモノは入り込めないので。

偶に精神が不安定な輩がそんな薄い邪氣でも引っ掛けつて事件を
起こしたりしているが、そんなものは優秀な警察がなんとかしてくれ
る。俺はのんきな一般人、無力な都民なのだ。

「うん、やっぱ中央は良いな、都会万歳！田舎は俺には合わないん
だよ！」

「もう田舎にや帰らねえからなあ……」

明々とした街灯に霞む夜空に思いつき叫ぶ。

もちろん都会であるからには周囲には人がいる。うん、思いつき
り見られてるな。

とりあえず怒られる前にやつたと帰るか。

あちこちの店から流れ出している流行りの歌をなんとなく口ずさみながら、俺は狭いながらも楽しい我が家へと帰路を急ぐのだった。

2、カラクリ仕掛けの蝶々は舞ひ

玄関のスイッチを入れて微かな光が灯ると、途端にパタパタとう微かな音が聞こえた。

「ただいま、蝶々さん」

2DKのじく普通のアパート、家賃は6万円。俺ぐらいの年代の男の一人暮らしには十分過ぎる城である。

流なんかはもつとマシな住居に移れとか言つが、あいつの感覚に合わせてたら破産する。絶対にだ。

何しろ将来の為に地道な貯蓄もしているのだ。まだ見ぬ可愛い嫁さんと我が家子よ、俺は頑張るよ。

元々大家族で生活していた俺にとつて一番堪えたのは実は孤独だった。

ぶつちやけて言つと誰も迎えてくれない家という物の物悲しさに凹みそうになつたのだ。

といつてもペットとか買う訳にもいかず（アパートはペット禁止だ）その代わりといつちゃなんだが、フルハンドメイドで作ったのが部屋をパタパタと飛び回るこの蝶々さんだ。

実は何気に俺の初めての完全オリジナル作品でもある。

白雲母の薄い羽と有機発光体と極軽量の光源電池、そして基板となる水晶針チップとセンサーを組み込んで作った単純な蝶の自動機械だ。

これは照明が灯ると舞い始め、センサーを使って障害物を避けながら金色の淡い光を纏つてふよふよと飛び続ける。

記憶野に簡易守護陣形を入れてあるので、障害物にじやまされな

い限りはその光で守護陣を自動的に張つてくれるので、セキュリティ機能もあるというなかなか優秀で可愛いカラクリなんだ。

だから、別に生物相手でも無いのに名前を呼び掛けるという不毛な行動をしても変じやあるまい？変じやないさ。うん、変じやない。

なにより、ふよふよしているこいつに話しかけると寂しさを感じないで済むという特典もあるのだ。というか、そもそもはそのつもりで邪魔にならない電子ペット代わりに作つたんだよな。

貧乏性が災いして、なんか実用本位の感じになつてしまつたが。

このパタパタという羽の動きには俺の今の職種に至る根源的な記憶が反映されてもいる。

俺が小学生の頃、うちの学校にカラクリ士なる人物が訪れて実演イベントをやつた事があつた。

羽ばたき飛行機なる物を自分で作つて飛ばしましょうといつ、『ぐくぐく単純な工作イベントだ。

だが、割り箸と輪ゴムと針金と障子紙という身近な物を使って、鳥のようにはいかないまでも自力でパタパタと飛ぶそれは、幼い俺の心を驚撃みにしてしまつたのだ。

単純明快な性格の持ち主である俺は、将来の進路をその時決めたと言つて過言ではない。

暴力と怪異に塗れた生活をしていた俺にとつて、科学と文明という純粹な人の知恵の結晶であるカラクリなる存在は、輝かしい光の道のように思えたのだった。

ふよふよと、しかし俺の行動を妨げない距離感で周囲を飛び回る蝶々さんを眺めてそんな過去の感傷を思い浮かべていると、脱いだ上着のポケットに硬く重い物を感じた。

「あ、そうか。流から預かつたんだつたな」

腕時計ウォッチの件を思い出した俺は、それをポケットから取り出すと詳細に見分してみた。

セキュリティコードは既に打ち込み済みなので、いきなり攻撃的防御陣を展開する事は無いので安心して調べられるが、このメーカーのウォッチは分解し難い事でも有名だ。

とりあえず風呂場の換気扇を回し、その間に道具を用意する。今まで度々この手の依頼は受けたので専用の道具を揃えてあるのだ。

「おっと、今回はモノがモノだから念を入れないとな」

俺は新しい透明の「ミ袋を取り出すと、それも携えて風呂場の換気扇を切り中へと入った。

ちょっと寒々とした狭い風呂場に作業台と椅子と可動式ライトを持込み、新しい「ミ袋を開いてその中に作業用具一式を展開する。精密部品には埃が禁物なので、専用ルームの無い自宅では普段から湿気が多い為埃の少ない風呂場がその代わりなのだ。

更にビール袋内での作業は念の入れすぎな気もするが、馬鹿高い新品の時計だ、そのぐらいの気を使つた方が良いだろう。

裏蓋を外すと、小さく緻密な部品が重なり合つてゐるのが見える。その様はまるで一つの芸術品のような美しさだ。

実を言うと、部品を組むという作業は俺の仕事的には専門外の部分で、アマチュアの趣味の領域である。

そんな未熟な身で、このような一級品のプロの仕事に手を触れるといふ事には一種の罪悪感さえ感じてしまう部分も確かにあつた。

だが、その一方で、人の知恵が創り上げたカラクリといつ仕組みの素晴らしいさに直接触れられるという高揚感も確かにある。

その双方は矛盾しているようで俺の中で混ざり合って、下手をすると、倒錯的と言われるような喜びを感じながら、俺はそつと竜頭を抜き取つた。

腕時計の部品という物は、蓋を外しただけではひっくり返してもバラバラにはならない。

この竜頭によって全ての部品が纏められているのだ。なんともはや、凄い仕組みである。

竜頭を抜いたら注意してブレスレット型の枠から中身を外す。

このブレスレットの防御陣はオフにしてあるとはいえ、なんとか心臓に悪い。何しろ軍で使われるような物だからちょっとどびつくりするとかいうような可愛らしい物では無いのだ。

ドキドキしながら基本的な解体を終え、いよいよ心臓部に当たる水晶針まで上に被さつた部品を剥がして行く。

機械の部品というよりも装飾品のように磨き抜かれ、細かく加工された部品の奥に、まるで隠された宝石のように鎮座しているのが水晶針機関、通称振動部だ。

その名の通り、それは針のようく細い水晶を何本も並べて敷き詰めた部品で、ほとんどのカラクリの心臓部にあたる物だ。そして、これの取り扱いこそが俺の本職である。

およそこの世界のあらゆる物には固有の波動があり、それは一定条件下において互いに干渉する。

その原理を利用して動力としたのが、現在のカラクリの心臓部であるこの仕組みだ。

波動はもちろん人間にある。

通常、条件が揃わない限り、生物の波動と非生物の波動は干渉しないものだ。

それはいわゆる波長の長さが違うからなのだが、世の中にはこれが規格外の人間がいる。

全てに干渉する波動を持つた人間。魔導者だ。

彼らは意識してあらゆる物に干渉して影響を与える力を持つているが、その一方で無意識状態でもあらゆる物に干渉している。

そのせいで水晶針動力と相性が悪く、常にある種のシールドか専用の調整を必要としていた。

つまり、流はその魔導者であり、このウォッチをそれ用に調整しなければならないという事だ。

ちなみに世界の権力者のほとんどはこの魔導者である。

通常、彼らはカラクリ式の装身具を購入する場合は、その店に赴いて調整するか（いわゆるオーダーメイド）、職人を呼んで調整する（いわゆるチューンナップ）のだが、実家からほぼ勘当状態の流の場合そういう訳にはいかず、安上がりな友人の俺に毎回頼んでいるという次第だ。

ん？あれ？もしかして俺、利用されてるだけ？

いやいや、あいつがそんな常人の考えるような思考をする訳がない。

何しろマッドサイエンティスト一步手前の変人なのだ。そんな常

識的な利益を追求するような男なら、そもそも実家から飛び出して発明家になろうとか考えないから。うん。

一時的に友を疑つた事に罪悪感を感じつつ（といつても別に親友とかじやないけどな）、俺は気合を入れ直してその綺麗に並んだ水晶針機関を眺める。

美しい。

さすがは一流メーカーだ。全ての針が均一で、その波形にブレがない。

この波形を測るのは専用の器具もあるのだが、一部の先天的な視界の持ち主はそれが実際に見える。

いわゆるオーラ眼と言われている視界で、実は人類の半数近くはこれを持つていて、見える才能はあるのに伸ばしていないので見えない場合が殆どだ。

まあそれはそれとして、俺は裸眼で見えるタイプなので、そのまま視界に透明な搖らぎを見る事が出来る。

水晶は最も他に干渉しない波動なので、（ダイアモンドもそうだが、価格的に利用し難い）細かいカラクリのエンジン部は殆どがこの水晶針だ。

細い針状の水晶を何本も重ねるのは動力幅を上げる為の仕組みで、あらゆるエンジンは基本的にこの作りに準拠している。

そんな水晶機関だが、干渉波動を持つ魔導者たる流の奴が、その身につけた状態で本来の精度で動かすには補助が必要だ。

そう、本来この調整を行うのが俺たちエンジニアなのだ。

細かい砂金粒を吸引手というス。ポイーのよづなツールで一粒一粒を摘み上げ、針の一本一本に乗せる。

本来、この2つの物質はそれぞれ鉱物であり、混ざり合つ事は無い。

だが、世界に思い込ませる事によって、それを可能にするのが精製と呼ばれる技術だ。

この原理には世界という物の構造が深く関わっている。世界はいわゆる思考によって出来ているのだ。

もちろんそれは個人のだけでも、人間種族だけのものでもない。この世界に或る思考する全ての物の思考が世界を成している。概念理論というやつだ。

この概念は時折局的に変動する事がある。

怪異マガモと呼ばれる化物が生まれるものその影響で、一時的な意識の揺らぎや強い想念がその根源だというのが最も新しい学説だ。

で、その概念を狭い範囲で変えるのが精製という技術であり、それを使ってチューニング（調整）は行われる。

難しく言つてみたが、もう殆どね、詐欺師の世界なんだよな、精製士ノジニアつて。もうね、騙しのテクニックなんだよ、要するに。

これには才能は必要なく、ひたすら訓練で身に付ける。

『理屈は後から付いて来るんだ!』 つてのが教官の言でした。

「さてと」

集中する。

言の葉は俺から出て世界に溶ける。

それは波のように広がり、そこに閉ざされた場を作る。

「“水晶はすなわち水の結晶、水は全てを受け入れる。黄金はすなわち陽光の力ケラ、全ての物に恵みを『与える』”」

簡単だが、定文化された精製式。

世界を揺らがせるその揺らぎの中で、水晶針は砂金の粒を受け入れた。

この僅かな波動の上乗せが、流の魔導に干渉されないギリギリのラインだ。

「よしつと

上手く定着したのを確認すると、もう一度手早くウォッチを組み直す。

これで頼まれ仕事は終わりだ。

ぐつたりした俺は、せっかく風呂場にいるにも関わらず風呂に入る気力も無くし、ベッドに転がり込む。

パタパタと軽く綺麗な羽音を響かせる蝶々さんが頭上で紋を描く中、手元のスイッチで灯りを消した。

やがてベッドサイドのテーブルの上に置いてある花の蕾の形をしたスタンドがゆっくりとその花弁を広げ、蝶々さんがそこに舞い降り、羽の色が銀色に変わる。

「おやすみなさい」

しかし、なんだ。

カラクリ相手に挨拶するような生活はやっぱり不健全かもしだいな。

吸い込まれるように跳つに落ちながら、俺はぽんやつとそんな事を考えただった。

3、弟は氷雪の「」とく

夜になると住宅街は暗い。

点々と道を示す街灯と街灯の隙間から覗く夜空は、都会ながらもささやかに煌めく星を散らして一人の帰路を慰めてくれる。

その先にポウと浮かび上がるコンビニは、さながら砂漠で旅人を潤すオアシスのようだった。

上司と回路設計の件で激論を交わしていささか荒れ氣味だった心には、その小さな温もりは有難く映つたのである。

「いらっしゃいませ！」

いつもの店員さんが元気よく挨拶をしてくる。

どうでも良いがこの時間に女性店員が一人とこのはビックリ？危なくないか？

昨今の男女平等の流れを受けて、深夜業務に女性が従事しているのを目にする事も増えたのだが、いつもそんなひやりとした気持ちになつてしまつて落ち着かない。

しかしまあ、考えてみれば夜の仕事の多くには昔から女性オンリーの仕事も多いし、余計な心配なのかもしれないが。

この時間ガラガラになつてている弁当コーナーを一瞥する。

自分で何か作る気力は無いし、特に食いたい物もない。強いて言えば肉が食いたいが、こういう所の弁当には殆ど肉は入っているのであえて考えなくても大丈夫だ。

「う……ん」

田舎での焼肉おにぎりが今日も絶賛売り切れ中だったのを確認すると、俺は溜息を吐いたのだった。

カンカンカンと甲高い音を立てる階段を、やや遠慮がちに踏みながら（1階の住人に乳幼児がいるのだ）自室に辿り着くと、何気なく鍵を取り出そうとして、次の瞬間そこから飛び退いた。

ドアノブに影で出来た蛇が絡み付いて威嚇していたのだ。

「おいおいおい」

その硬質で冷たい感じには覚えがある。

そもそも影呪使いで俺に対して呪を放ちそうな相手は一人だけだ。いや、普通は呪なんか放たないんだろうけど

ともあれそのままだと中に入れないでの、手に持った鍵を礫を放つような形で構え、小さく文言を呴く。

「月光の銀矢、闇をつらぬけ」

細い三日月と銀色に鈍く光る鍵を視界上で重ねると、極小さな光が跳ねた。

劇的な何かが起ころる訳でもなく、ふいつとその影の蛇は搔き消える。特に何かを込めていた訳ではないのだろう。

いや、本格的な呪を込められても困るけどね。ははは……。

今の気持ちを端的にどう言い表したら良いのだろう？

ドライアイスを素手で掴まなければならなくなつたような時の覚悟みたいな？

いや、もはや相手には気付かれているのは確定なんだから、こんな所でグズグズしているとまた何か俺の大事な威儀（？）のような物が剥がれ落ちて行くような気がするので、覚悟を決めてドアを開ける。

あれ？これ俺の部屋だよね、マジで。

「た、ただいま……」

既に灯りが点ついていて（暗闇だつたらそれはそれで怖い）、うちに蝶々さんがのんきに羽ばたいている音がする。

無事だつたか、マイハニーよ。

「おかえり、兄さん」

帰宅の挨拶に、可愛らしい人工の羽音だけではなく、さながら夜明けに降りる霜の「ごとくひやりと温度を下げる声が応じた。

「浩一、来てたのか」

玄関を上がって直ぐがいわゆるダイニングキッチンになつてているのだが、なぜかそのフローリングに正座している我が弟。

いや、来るのは分かつてましたよ。玄関の蛇的に。

とぼけた方が物事がスムーズに行く事もあるのさ、人生いくばくか生きてると学ぶ事がね。

思わず遠い目になつてしまつた俺を訝しげに見やると、うちの弟くんは足が痺れた様子もなく自然な拳動で立ち上がつた。

どうでも良いが都会でその服装はかなり浮いてるんじゃないかな？いや、むしろ都会だからなんでも有りでいいけるのか？

一見した外装は、白と紺で織られた作務衣風味だが、袖口から黒のアンダーが覗いてたり、よく見るとびつしりと怪しげな曼荼羅（と言つても仏様が描かれているのじゃなくていわゆるさんまやーという奴だ）が描かれていたりと、下手するとどつかのコスプレ野郎に見えなくもない。

顔立ちは、野性味溢れる俺と違つて、どこか硬質な、ぶつちやけて言つてしまえば一枚目に分類されるようなタイプの生真面目顔で、服装と顔立ちの両方が合わさつて、どこかの新興宗教か武道を修行

中の青年といった感じにも見える。

うん、こいつは母方の爺さんに似てるとかで、俺とは系統が違う顔なんだよな、あえて言えば妹も母方の顔立ちだ。

……オノレ、ウンメイノカミメ。

何か心の声が呪いを放ったようだが、気にすまい。

「兄さん、聞いていますか？ すつとぼけても無駄ですよ」

おおっと、何か説教が始まる気配に、俺の脳にエマージェンシーシグナルが点滅した。

「そ、そ、うだ、そ、んな所に座り込ん、だ、た、んだ。冷えただろ、う？ あ、つちで、お茶、でも、し、ない、か？」

「兄さん」

「あ、ああ？」

「その買い物袋は夕食ですか？ いわゆるコンビニ弁当とこいつ物ですね？」

まさかそんな方面から攻めて来られるとは思つてもいなかつた俺は、思わず壊れた首振り人形のようにガクガクとぎこちなく頷いた。やたら潔癖な所があるうちの弟殿はそんな俺に向かつてまるで今から刻む鬼を見るような冷厳な眼差しを向けている。

「そんな栄養の偏つた物を食するなど、自分を貶めているようなものですよ。食は即ち身命の基です。それをないがしろにするなど、兄さんには一人暮らしは早いのではないですか？ ざつと見た所世話

をしてくれるお相手も居なによつですし」

恐ろしい。

何が恐ろしいかとこつと、この弟殿は正論を展開している時程“氣”が漲つてゐるという事がだ。

なんというか、こやつは説教しながら敵を倒すタイプなのだ。まあ怪異に向かつて説教するのもどうよ~とは俺も思うのだが。

弟殿の周りに何か怪しげな閃きが時々見えるが、あれを飛ばして来たりしないよな?一応お兄ちゃんなんだぜ?俺。

「聞いているのですか?」

「うあい~」

思わず氣をつけをしてイイ返事をしてしまつ。ちよつと上ずつたのはこじ愛嬌だ。

「それになんですか、その袋は?今世はH'Gが常識でしょ?現代人たらんとした兄さんがそのような事でどつするのですか?」

「コンビニの袋をそのまま貰つて帰つて来た事にまでツツ H'Gが入つた!」

田舎の方ではそんな分別H'Gとか普及してないと思つていたが、甘かつたようだ。

でも、これはこれで色々便利なんだよ?溜めすぎると始末に困るのは確かだけどさ。

そう思つても口に出せないへタレつぱりで、俺は大人しく4つも下の弟の説教を頃垂れて聞いている。

「兄さんがとうとう戻つて家を継ぐつもりになつたと聞いて安心して家を開けて仕事に出ていたら、試練を終えた後はさつさと中央に戻つてしまつとか、僕や由美子を待ちもしないで。あまりにも酷いのではないですか？」

いや、家を継ぐ云々は思い込みだ、俺は一言も言つてない。

「会わざに帰つた事は悪かつたと思つてゐる。その、お前や由美子に別に思う所があつた訳じやないんだ」

とりあえず謝り倒す、これしかない。

下手に言い訳をすれば俺の人生は終わる。恐らく、きっと。

「当たり前です。兄さんがそんな風になつてゐるならきっと何か良からぬモノに取り憑かれているに違いありませんからね。せめて僕の手で葬つてさしあげます」

「こきなり葬るな！」

流石に思わずツッコんで、ひやりとした目で見られて口を閉ざす。怖い。たかだか22の若造の癖にとんでもない迫力だぜ。

「それで、兄さんは家に帰らないつもりなんですか？」

「それは家を出る時にさんざん話し合つただろ？今の時代に家業に縛られるなんてナンセンスだ」

「……それで、こんなオモチャを作つて暮らすところのですか？」

部屋を飛び回る小さな蝶を模したカラクリをチラリと見やると、弟は切つて捨てるような勢いでそなじる。

だが、

「オモチャを馬鹿にするもんじゃがない。文明と共にオモチャは育つて来たし、人はオモチャに触れて育つて来た。オモチャを作つて楽しむ事が出来るつていう事は人が人である証^{あかし}もあるんだ」

これだけは譲れない。

俺が心動かされ、道を選んだ、その象徴^{カラクリ}が玩具だからだ。

「そうですか。しかし、その志と仕事は少々離れているようですが

ど」「うつ」「

グッと詰まる。

実際俺が今務めている会社はそこそこ優良企業とはいえ家電の会社なのだ。

俺が大見得切つて飛び出した理由から微妙に離れている事は否めない。

「基本は同じだよ。機械^{カラクリ}である事には変わりない。それに人の役に立つ仕事だしな」

「物は言いうですね」

ヤバイ、納得しない。まあそりやあそうだよな、うん。実は俺も納得しないからな。

だつて就職先の選り好みなんか出来る状況じゃなかつたんだよ。特殊技能持ちつて言つたつてまだまだひよつこだしな。

「どひひひひお前はどうして中央に来たんだ？それって仕事着だよな

？」

話しを逸らす為というより、気になつていていた事を切り出してみる。

「兄さんが家業を投げ出したとしても誰かがそれをやらなければならぬでしょ。怪異は常に新たに発生しているし、一度発生してしまえば自然に消滅したりは滅多にしないものですからね」「いやいや、そういう事じゃなくつて。これは結印都市じゃないか、ここに仕事なんか無いだろ?」

ふうっと、浩一は妙に深い溜息を吐いてみせた。
「ふん、俺に対する嫌味だよな、あれ。

「これが平和ボケというもののですね。仮にも鬼伏せの家の長男たる者が情けない限りです」
「あー、情けなくて悪かった」

弟殿の言葉に、急激に不安が押し寄せた。

俺は何かを見落としてる? そういえば、俺は“どうして”蝶々さんに結界を仕込んでいるんだろう?

「アレを飛ばしているのですから、とっくに分かっている事だと思いますけど、そうですか、こつものアレですね。無意識というか野生の本能というか」

弟殿、浩一は、まるで俺の想いを读懂だように蝶々を示すと、何やら酷い言いがかりを口にした。

「兄さん、怪異の生まれる仕組みを覚えてますか?」

怪異の生まれる仕組み、か。

怪異は存在するものの意識から生まれる。いわば夢と現実との間に生まれた忌み子のような存在だ。

より強固でより強い意識が最も強大な怪異を生むと言われている。
最悪の怪異はこの星の夢から生まれたと言われている。

ちなみに、最悪の怪異とは煉獄の事だ。

まあこれは今回関係ないだろつ。

つまり……なるほどな。

「あ～、なるほど、人間がこれだけ寄り集まっているんだ。外部の怪異は防いでも、内部で新たに生まれる分があるって事か」「“人間”だけでは無いんですけど、まあそのような物です」

俺は今までこっちで形を持つ怪異に遭遇した事が無かつたからすっかり安心していたが、理屈的には確かに有り得る話だった。

「それに、結界で守られているといつても、それで外の怪異が消える訳ではないのですよ。放置された外の怪異が固定化して成長したら、やがてはこの結界も持たなくなるでしょう。我らが必要では無くなる事は無いのです」

「それは違うな」

自分で思つた以上に、俺は固い声を発していた。
浩一がぎょっとしたように俺を見る。

「人類を甘く見るな。今や人間は個人の勇を頼らなければならぬような弱い種族ではなくなつた。人間はその気になれば能力者に頼らずに巨大な怪異を倒すだけの力がある。軍隊や兵器が、な」

「そうだ、つい同族同士の戦争の道具にしか思われないそれらだが、それは怪異^(マガモ)にも力を發揮する。」

今や人類は非能力者でも怪異を倒せる力を得たのだ。

「一発で国費を搖るがすよつなミサイルを使ってですか？」

だが、浩一はそれを冷笑でもって迎えた。

その道を真っ直ぐ進んできた弟にとつて、たかだか数十年で台頭してきた兵器などと自分たちを比べられるのは業腹なんだろ。

「そうだ。それだけの代償を持つてすれば、俺たちじゃなくとも戦えるんだ。誰かが犠牲にならなければならぬ時代はもう終わったんだよ」

それでも、俺は伝えたかった。

ほんの一握りの、勇者と呼ばれた者達が死力を尽くした犠牲の上に平和を築く時代はもう終わって良いのだと。

弟は一瞬眉をしかめると、俺を一警して息を吐いた。
呆れたとか苛立ったとかいう顔では無かつたが、正直どういう感情がこの一本槍で生真面目な弟の中に生じたか俺には知りようもない。

「とつあえず兄さんの話は聞かせてもらいました。これで失礼します」

よくよく考へると、台所でいい年した男一人が向い合つて話しあるつてなんか嫌な図だよな。

「おい、茶ぐらい飲んでけよ
「いえ、最終に間に合いませんので。それから……」

浩一は「じん」と襷掛けしたカバンから何やら取り出すと俺に手渡した。

「今後の買い物にはこれを使ってください。ちゃんと防水加工もしてありますからね」

押し付けられたのは濃紺の『テカイ風呂敷』だった。

ちよ、お前、これで俺に買い物をしようと? そう言つのか?

「ちよ、浩! 」

「ああ、ナニハナ? 」

文句を言おうとする俺の機先を制するよつて、弟殿は振り向いた。

「俺には由美子を止められませんから、せいぜい注意してくださいね」

「う? え! ? 」

「怒つていましたからね。…… ものすごいく

ドアを閉める間際にニイと笑つてみせる。

その笑顔に、背中に氷柱が生じるような思いを抱きながら、俺は弟が去る足音をただ聞いていたしかなかったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2006z/>

エンジニア（精製士）の憂鬱

2012年1月8日23時46分発行